

伝記 良寛さん―後編 まとめ

「伝記 良寛さん」をこれまで前編「子供・生活・文芸」、中編「僧として」の二章にまとめました。最終章として後編「まとめ」で閉じます。

風貌、風采です。

体ゆたかで、あご長で、動作はゆったりで、言語もゆっくりだったそうです。

良寛さんは曹洞宗(禅宗)の僧です。

良寛さんの名乗りですが、没後和尚とか禅師とかを付けますが和尚の資格は持っていませんし、禅師は朝廷からもらう高位で、良寛さんにはありません。後世の人が尊称として付けたものです。

師匠の大忍国仙からは大愚良寛たいぐりょうかんの名です。

良寛さんは詩や文章の署名には「沙門良寛」・「釈良寛」・「良寛坊」・

「良寛」としています。

筆者はここでは当時呼ばれていたであろう「良寛さん」としました。

良寛さんの好きなことは文芸の外に子供との遊び（かくれんぼ、手毬、おはじき等）、囲碁、盆踊り、お酒も飲みます。

あんまや灸が得意でした。

詩集は生存中から又没後も編集されました。「草堂集貫華」・「古留散東」・

「良寛尊者詩集」等です。

良寛さんの嫌いものは「詩人の詩、書家の書、歌人の歌」と言われています。いわゆる売るために作るプロの作品は嫌いと。

しかし西行の歌や松尾芭蕉の俳句は好きです。又江戸の書家が五合庵に訪ねてくれば和やかに応対します。

女性との付き合いです。

何人か親しく付き合う女性はいたのです。敬慕して庵に来る女性です。

貞信尼が有名です。一休和尚の実質妻の森女のような関係ではありません。

良寛さんが七〇歳で貞心尼が三〇歳位の時に良寛さんを信奉して訪問します。死没の五年前ぐらいからのお付き合いです。大変意気投合して和歌のやりとりをします。

貞心尼は良寛さん没後和歌集「はちすの露」を編集します。

良寛さんからの返歌を一首。

「つきみてよ（まりを）
ひふみよいむな 一二三四七八 ここ 九の十 とお 十とをさめて またはじまるを」

時々庵に来て晩年の良寛さんの身の回りの世話をしたとのことでした。

最期です。

良寛さんは天保二年（1831）雪の降る夕方、終の棲家になった支援者の一人越後島崎の木村利藏家の裏の古い小屋で亡くなりました。木村家では新居を建てることを申しでしたが、断りました。

七四歳でした。

越後に帰って三度目の住居です。

時世の歌や句はありません。

最後の言葉は「阿」あの一声のみです。遺偈ゆいげと言われています。

後世の研究家は人間は生まれてすぐの赤ちゃんは「あわわ」と言う。死ぬ時も最後の言葉も「あ」と。

導師は越後与板の曹洞宗（禅宗）徳昌寺の大機和尚、その外真言宗、浄土真宗、日蓮宗等十五寺の寺から十八人の僧が葬儀に参列しました。

墓は浄土真宗の隆泉寺の木村家の墓地に建てられました。

良寛さんは曹洞宗で僧になりその後六年間も遊行したのですが、本山の越前永平寺に行かず、立ち寄ったのは真言宗、浄土真宗、日蓮宗、比叡山の寺々です。曹洞宗とは縁を切って永平寺を非難したと言われていましたがそんなことはないのです。

良寛さんはどの宗派も非難したりせず、どの僧とも仲良くしていたのです。それ故宗派を超えて良寛さんを信奉する僧が葬儀に参列しました。

それでは良寛さんが大好きな研究家の結論をまとめてみましょう。

良寛さんは僧として高位に就いた高僧ではなく一宗一派をなした空海、

最澄、法然、親鸞、栄西、道元のような名僧ではありません。

しかし寺を持たず、弟子を持たず、説法をせず、ただ釈迦の教えと曹洞宗（禅宗）の始祖道元の教えを純粹にとらえ一修行僧として身をもって村人に慈愛の大事を示しました。

身分、階級、男女、大人と子供、人を分け隔てしない、むつみ合う生き方を自らで示しました。法華経に基づく大慈大悲の生き方です。

宗派を超えて僧と付き合いました。

良寛さんの思想の根幹は「人を分け隔てしない」（大慈大悲）、「人にやさしい言葉をかけて励まし慰める」（愛語）、「人を傷つけることを言わない」（戒語）となるでしょう。

これを他人への説教するのではなく自分へ戒めとして残されました。

明治時代初期の曹洞宗の高僧で仏教学の碩学の原担山は良寛を「我朝仏学の蘊奥（奥儀）^{うんのう} 究めしものは空海以下唯此人あるのみ」と言ったそうです。

しかし明治時代に入ってもその他の知識人には理解されず、大正に入ってから詩人の相馬御風^{そうまぎよふう}が紹介して知られるようになりました。

稀代の名僧としました。

筆者もそう思うようになりました。

それでも筆者は疑問に思うこともあります。

何故良寛さん住職（和尚）の資格を得なかったかです。正式の僧の職位を得ていますので和尚の位は本山の永平寺に行けば一日で得られます。

どの宗でも僧は修行僧を経て和尚の位を得て住職になるか大寺で役職につき、寺の運営の仕事につきます。

良寛さんはあえて本山に行かなかったことは間違いないでしょう。

理由として研究者の多くは本山の腐敗墮落をあげますが、良寛さんはそんなことは直接的には言われていません。みんな漢詩の中からの憶測です。

それはあったとしても良寛さんは住職になりたくなかった理由が外にあるのではないかと云う研究者もいます。

自分には寺を運営する能力がないことの自覚があったのではないかと思えます。

寺は檀家の葬儀、法事を営む仕事があります。檀家から布施・寄進を得て経

済的に自立しなければなりません。僧の育成の仕事もあります。本山に寄進もしなければなりません。

良寛さんは出家前に名主見習いの仕事が出来ませんでした。代官と農民の間に立つての調整役の仕事が不得手でそれが元で、家出したと言われています。

良寛さんは組織の運営、経営の仕事が不得手なのです。

良寛さんは僧位を得る時に円通寺の師匠の大忍国仙和尚から印可いんかを与えられます。

国仙和尚の印可の偈げ（与えられた詩）は次の通りです。

附良寛庵主

良也如愚道轉寛

良いかな愚の如くにして道みち転う寛なること

膳々任運得誰看

膳々任運誰か看ることを得ん

為附山形爛藤枝

為に附きんぎょうらんどうす山形爛藤の杖

到處壁間午睡閑

到處へきかんの壁間午睡ごすいの閑かんなれ

水月老衲仙大忍

水月老衲仙大忍

「まるで愚者のようであるかに見えるが、その道心の広大なることは、あたたかも大海の波のように自然の理法になっており、また凡人の眼にはそれと判別できるほど容易なものではない、

古藤の枝で作った杖を進呈しよう、歩き歩いて壁にぶち当たったならば、そこのわずかな物陰にでもまずはのんびりと昼寝でもさっさしやれ」

（読み下し文、訳は松本市壽著 「野の良寛」より）

良寛さんは円通寺で修業中において動きが鈍く愚者のように見えたのですが、師国仙和尚はよく見抜いて良寛の学識の深さ、悟りの深さを認知していました。

後の二行は「お前は寺での僧の仕事は無理で、杖をやるから遊行にでることを勧めている」ようにも伺えます。

ですから本山を非難して寺の住職にならなかったのではなく、自分の性格から師の勧めで一人で仏道の道、衆生済度の道を故郷で歩んだのだないかと思われます。

ただの遊行僧ではありません。仏教、儒教、国学の造詣が深く、文芸にも秀でており、そして隠遁の生活ではなく、よく村人と付き合ひ、説法ではなく自ら身を持って釈迦の教えと道元の教えを示した人です。

弟子もいませんので後を継ぐ僧はいません。

寺も持たず、法事もせず、布教もせず、弟子も持たず、宗派を超えて仏道を実践した人です。

このような僧は前にも後にもいないでしょう。

日本の仏教史上屈指の名僧と言えるでしょう。

以上

二〇二五年十一月一日

梅 一声